

教育への思いとその変遷

比嘉 達夫

私の大学時代は学生運動が頂点に達しすぐ後に崩壊を迎えるという激動の時であった。前半は学生運動の影響をまともに受けた学生生活を送ったが、物理学や数学への思いだけは何とか持ちこたえた。2年の最後の頃には、3年からの専門課程として物理学科に入るか数学科に入るかで迷いに迷っていた。いくら考えても決着がつかない。そんなある日、普段と同じように数学の本を読んでいるとき突然強い感動に襲われた。19世紀末に活躍したゲオルグ・カントールという数学者が晩年に残した「数学は自由である」という言葉と読んでいた本の内容が共鳴して数学の本質が見えたような気がしたのであった。カントールは現代数学の基礎となる理論を開拓した人であるが、無限に対する考え方をその時代の高名な数学者から痛烈に批判され悲惨な晩年を送った。そのような状態での言葉であるため真意は計り知れないが、以前から私の心を照らす灯となっていた。この感動によって今日まで数学とともに人生を歩むことができた。その後、立教大学で教育者として生きていく中で、カントールの言葉はいつしか「学問は自由である」に変わり、この意味も「学ぶことは自分をより広い自由な世界に解放することである」と変化していった。

立教大学理学部に助手として着任したとき、数学科の学生たちが学ぶ意欲に溢れていることに驚いた。35年も前の話である。担当する演習科目の中で

本格的な数学書を紹介したところ、学生たちはその本で「自主ゼミをするからつき合って欲しい」と言ってきたのである。今の学生と違って、彼らは特に成績を気にする様子はなかった。数学という学問に対する畏敬の念と知識への憧れを共有できたので、学生たちと私の間に自然な絆が生まれていた。まさに「数学は自由である」を具現する人たちであった。教育は自動的に遂行されていた。その後しばらくは同様な状態が続いていったが、90年代に入る頃には学生のあり方に変化が現れ始めた。私もやっと教育について意識的に考えるようになった。

90年代半ばには一般教育部の解体と新制度の立ち上げが大きな問題になった。そのころ縁があって一般教育部の先生方と接触する機会に恵まれ、先生方の様々なかつ複雑微妙な思いを聞くことができた。教育が数学科の中のみで閉じていたのが一挙に全学的な視点から捉えることができるようになった。1997年から全学共通カリキュラムが始まり、程なくして私も文系の学生を対象者とする授業を担当することになった。通常の講義科目と演習科目であった。これが私に教育上の大きな転機を与えることになった。文系の学生に数学を通して何を伝えたいのか自問していた。単なる知識の羅列では本当の教養教育にならない。学生の心に何がしかの灯がともせたらと痛切に思うようになってきた。「学問は自由である」というのが根底の狙いであるとし

でも、そこに至る数歩手前で理系文系いずれの学生たちの心をも開けることができると願うようになっていった。実際の授業ではなかなか思い通りにいかなかったが、意図を汲み取ってくれるような優れたレポートを書く文系の学生が少なからずいることに驚いた。特に、2010年に担当した「立教生の学び方」でこれが顕著であった。彼らは日常的に本を深く読み込み、それによって高い論理的思考力を身につけていると判断できた。全カリ授業を担当してからは、数学科の学生たちに「本を読みなさい」とうるさく言うようになってしまった。

全カリが発足した数年後には「全カリ運営委員会」の委員を務めることになった。しかも、「全カリ白書」の原案を作成するという大任を課せられてしまった。幸いにも、全カリの成立過程もある程度は把握していたし、すでに全カリでの授業も経験した私の内部には全カリに対する思いが溜まっていた。全カリの理念および全カリの良い面とそうでない面について一定の考えを持っていたので、意を決して書き始めると事は意外にスムーズに運んだ。さほどの修正箇所もなく白書として完成させることができた。時の全カリ部長からお褒めの言葉を頂き、苦労は吹き飛んでしまった。

教養主義の時代はすでに遠い過去のものとなった。しかし、教養そのものは生き残っている。教養とは「自分を自分自身が教育する力」であると考えてきた。この意味で教養は人が生きていく上での大きな力になり得るものである。

ひが たつお
(本学理学部教授)